

ユネスコESD福島ニュース No.2

特集 福島=ネパール・ビデオレター交流プロジェクト

【発行】法政大学キャリアデザイン学部・福島ESDコンソーシアム 編集責任者 坂本旬



写真：左上、右下は郡山から会津若松に向かう磐越西線からの眺め。右上、ネパール 左下、白方小学校6年生の実践の様子

<<目次>>

- 福島=ネパール・ビデオレター交流を支える二つのユネスコ教育プログラム 坂本旬(法政大学) 2
- 地域に根ざし、持続可能な未来を切り拓こうとする児童の育成
～ ESDの日常的な実践を通して～ 古田 浩(白方小学校) 5
- ネパールとの交流学习を通して ～ 児童が身につけた「4つの力」～ 福本 拓人(白方小学校) 6
- ユネスコ・カトマンズ事務所からのメッセージ タップ・ラジ・パント(ユネスコ) 7
- 佐藤彌右衛門さんにお会いして 寺崎 里水(法政大学) 8

平成27年度文部科学省ユネスコ活動補助事業[グローバル人材の育成に向けたESDの推進事業]
福島ESDコンソーシアム事務局本部 法政大学キャリアデザイン学部

福島=ネパール・ビデオレター交流を支える二つのユネスコ教育プログラム

坂本 旬

法政大学キャリアデザイン学部
アジア太平洋メディア情報リテラシー教育センター
理事長

■福島=ネパールの学校をつなぐ

白方小学校に真新しいタブレットが10台やってきたのは7月の半ばのことです。子どもたちはタブレットで映像を撮影する方法を覚え、いろいろな授業で使うことになりました。二学期になると、学校紹介ビデオを作って10月24日の祖父母参観日に上映することになりました。子どもたちはタブレットを持ち、学校生活の様子を取材し、一つの作品に仕上げました。学校紹介ビデオ制作を通して、子どもたちはもの見事に映像制作をマスターしたのです。

そして、11月からネパールのチャンディカデビ小学校の間でビデオレター交換の実践が始まりました。ご存知のとおり、4月25日ネパールで大地震が起き、多くの人が亡くなりました。そして今なお、多くの人がテントや仮設住宅で生活をしています。東日本大震災を経験した福島の子どもたちがネパールの大震災を経験した同年代の子どもたちへビデオレターを送ることにしたのです。

11月26日、国際学校建設協会の石原ゆり奈さんと武村佳奈さんが白方小学校6年生の子どもたちにネパールのチャンディカデビ小学校を紹介しました。子どもたちにとって、ネパールはとても遠い国です。4月に起こった大地震はニュースで知っていても、同じ年代の子どもたちがどんな生活をしているのか、まったく知りませんでした。この授業で初めてネパールの山奥にある小学校の様子を知ることになったのです。そして、子どもたちは遠い国から送られてきた子どもたちの絵を見ました。それはたくさんの花の絵でした。

白方小学校の子どもたちは、学校生活や遊び、給食、掃除の様子や東日本大震災の体験を映像にまとめて一本のビデオレターにしました。そして年が明けた1月19日、白方小学校の子どもたちが作ったビデオレターをチャンディカデビ小学校に持って行って見せたのです。

電気はありますが、しばしば停電します。学校はトタン屋根と竹とムシロで作った校舎とトタンで作った教員室と教室のある小さな校舎があるだけです。そこに小学校1年から5年生までおよそ100人の子どもたちが勉強をしています。停電に備えて、プロジェクター用のバッテリーを用意しました。車で4時間の山道を登り、ようやくチャンディカデビ小学校に着くと、子どもたちが校庭に集まり、私たちを大歓迎してくれました。

■発展途上国と映像教育

チャンディカデビ小学校は、地震によってそれまで使っていた校舎が壊れて使えなくなってしまいました。今はトタンとムシロの仮校舎です。校舎が足りない時は外で勉強します。まず学校を立て直すことが最優先なのに、ビデオレターをやりとりする教育がほんとうに必要なのだろうか、そんなことをするお金があれば、少しでも早く学校を建設する方がいいのではないか、そんな思いが頭をよぎります。

しかし実際にビデオレターを上映すると、そんな不安は吹き飛んでしまいました。小さなトタンの教室は子どもたちと先生方でいっぱいになりました。上映が始まるとみんな声を潜め、食い入るようにビデオレターを見ました。日本人なら誰でも知っている小学校の日常生活も彼らにとっては初めて見る光景ばかりでした。

翌日、ネパールの子どもたちにタブレット端末を3台用意し、ごくごく基本的な撮影の仕方を教えます。本当は絵コンテを作ってから撮影するのですが、残念ながら時間がなかったため、撮影と編集だけをやることにしました。

子どもたちに言いました。何を撮影してもいいよ、日本の子どもたちに一番伝えたいことをみんなで相談して決めなさい。すると子どもたちは話し合いを始め、一番伝えたいことを教えてくれました。地震で壊れた学校や家の様子を日



本の子どもたちに見てほしいというのです。決めるやいなや、子どもたちはタブレット端末を持って学校を飛び出していきました。山の斜面を駆けまわる子どもたちにはとてもついていけませんでした。

子どもたちはこの他に村の生活の様子や遊びの仕方などを撮影しました。またある子どもたちの班は、日本の子どもたちが紹介してくれた松ぼっくりに色を付ける様子とまったく同じことをやってみせました。

最終日は映像の編集です。撮影した映像をみんなで見て、3つの班ごとに撮影した映像を使って文章でストーリーを作ります。そのストーリーに合わせて編集を行い、返信のビデオレターをつくりました。最後にみんなで作ったビデオレターを見ることにしました。子どもたちは高く掲げたパソコンの画面を真剣に見ていました。ネパールの子どもたちの作った作品には二つの大きなメッセージがありました。一つは震災で壊れた学校や家の様子と、震災後生活の苦労を伝えたいという思い。そしてもう一つは白方小学校の子どもたちと一緒に遊びたいという思いでした。

■持続可能な開発のための教育

ビデオレターの実践には、ユネスコの二つの教育プログラムが関わっています。一つは「持続可能な開発のための教育」(ESD)プログラムです。現代世界には環境や貧困、飢饉、福祉、健康、衛生、人権、ジェンダー平等などさまざまな課題があります。

2002年、南アフリカのヨハネスブルグで国連「持続可能な開発に関する世界首脳会議」が開かれ、「持続可能な開発に関するヨハネスブルグ宣言」が採択されました。同じ年の12月の国連総会に日本とスウェーデンは「国連ESDの10年」を共同提案して採択されました。これがESDの始まりです。2014年の「国連ESDの10年」と同時に「ESDに関するユネスコ世界会議」が名古屋開かれ、その後を引き継ぐグローバル・アクション・プラン(GAP)が採択されました。

そして、昨年9月に開かれた国連総会で2030年まで世界が克服すべき17つの目標が定められました。これを「持続可能な開発目標」(SDGs)といます。ESDはこの新たな目標を追求することになったのです。

ESDの目標は、世界的な課題を身近な地域から



解決できる人間を育てることです。国連で決められた目標を追求するために、世界中の学校で取り込まれる世界的な教育運動だと言っていいでしょう。ESDは日本が国連に提唱して始まったため、とりわけ日本のユネスコ運動は熱心に取り組んでいます。全校を挙げてESDに取り組む学校はユネスコスクールに登録されます。世界では1万、日本では1000校を超えるユネスコスクールがあります。ユネスコスクールでは、世界の課題を学びながら、同時に身近な地域のさまざまな課題に取り組む教育を進めています

福島もネパールも大きな震災がありました。自然災害と防災もESDの大きなテーマの一つです。ネパールは発展途上国であり、震災に加えて貧困や健康・福祉という大きな課題を抱えています。福島とネパールの学校間交流にはESDに関する多様な学習課題を含んでいます。

■メディア情報リテラシー

ユネスコが取り組んでいるもう一つの教育プログラムが「メディア情報リテラシー」(MIL)プログラムです。これに「異文化間対話」をつなげて「メディア情報リテラシーと異文化間対話」(MILID)と呼ぶこともあります。「メディア情報リテラシー」はメディア・リテラシーと情報リテラシーという二つのリテラシーをつないだ用語です。

もともとユネスコはメディア教育を推進してきた歴史がありますが、メディア・リテラシーという呼び方を始めたのは2007年に国連事務局直属組織として「国連文明の同盟」(UNAOC)が設立され、4つの主要な任務のうちの一つとしてメディア・リテラシーの普及がうたわれてからです。ユネスコはUNAOCと協力しながら、メディア・リテラシー教育運動を国際図書館連盟が推進してきた情報リテラシー運動と統合し、2011年に教職員研修用カリキュラムを作り、世界中に普及させる取り組みをはじめました。

日本では情報リテラシーというとパソコンの使い方のようなニュアンスがありますが、ユネスコでは、情報を収集・批判的分析・整理・発信する能力のことをいい、情報リテラシー教育の担い手は図書館、とりわけ大学図書館や学校図書館であると考えられています。そして情報リテラシーは探究学習や生涯学習に欠かせないものだと考えられています。

■二つのプログラムを統合する

ユネスコとしてはESDよりもMILの方が新しい運動であるため、日本でもこれまではあまり知られていませんでした。しかしESDとMILという二つのユネスコの教育プログラムを統合するという考え方は、とても理にかなっています。

もちろん同じユネスコですから、両方とも教育の目標にSDGsがあります。子ども主体の学びを大切に、探究的学習を重視する点も同じです。MILは読み書き（識字）能力を意味するリテラシーを多様なメディアに拡大したものであり、あらゆる教育の土台に位置するものです。

今回の実践をMILの観点から見ると、メディアの制作と読解、そしてコミュニケーションという過程を含んでいます。つまり、相手にメッセージを伝えると同時にメディアを批判的に分析し、深く考えながらメッセージを理解するスキルを身につけることが必要です。そこには編集という大切な過程が含まれます。あらゆるメディア・メッセージは構成されたものである、これはメディア・リテラシーの原理です。その原理を学ぶためには学習者自身がメッセージを伝えるために編集するという経験が必要です。もちろん文字媒体でも同じです。

ビデオレターは目的やテーマを決め、ストーリーボード（絵コンテ）をつくり、撮影したものを編集するという過程をへて制作します。映像制作だけならば、学校紹介ビデオや学習発表ビデオと似ていますが、送り先（視聴者）が明確であることが大きな違いです。ビデオレターの交換はコミュニケーションへとつながっていきます。そして何よりも、互いの文化の理解のツールとなります。

ビデオレターは映像を使ったコミュニケーション手段ですが、他にも手紙や絵、カードの交換も同時に行うことができます。今回もネパールから福島へ絵が送られています。他の学校間交流でも絵やカードの交換はよくやります。

けではなく、多様な形式のメディアを使い分け、そのメディアとしての性格を理解することも大切です。

■ビデオレター・プロジェクトを世界に

海外とのビデオレター交流はビデオテープの時代からありました。しかし、MILの観点から取り組まれたことはありませんでした。異文化交流の一つのツールという扱いでした。そのため、ビデオレター交流によって、子どもたちにどんな力を身につけさせるかという発想がなかったのです。

しかし、タブレット端末やスマートフォンが急速に普及する現代社会では、映像はただ受動的に見るものではなく、自らのメッセージを世界に発信するメディアとして捉えることができるようになりました。映像は感情に訴える力があり、権力が市民をコントロールするために使われるだけではなく、市民が権力に異議を申し立てたり、世界中の市民と交流したり、新しい運動を起こすためのメディア様式としてとても重要です。ソーシャル・メディアの普及はこれらの運動が国境を超えることを容易にしました。これからの学校は、文字の読み書きと同じように映像やソーシャル・メディアの読み書きが必須となる時代が必ずやってくるでしょう。それは新しい時代のリテラシーなのです。

福島＝ネパール・ビデオレター・プロジェクトは二国間だけではなく、すでにアメリカの小学校が4月から参加を希望しています。子どもたちは外国語と映像という二つの新しい言語を用いて、子どもの時代から互いに理解し合う道を見つける方法を学びます。これこそが、持続可能な開発の課題の解決の担い手を育てる教育につながるのです。



地域に根ざし、持続可能な未来を切り拓こうとする児童の育成

～ESDの日常的な実践を通して～

古田 浩

福島県須賀川市立白方小学校長

本校は福島県の中央部にある須賀川市の西部に位置します。田園地帯の中に立ち、近くには里山もあり、豊かな自然に恵まれています。また、広い校地内には農村公園や学校農園、ビオトープ等があり、震災前は生活科や理科の観察学習、総合的な学習の時間の環境学習を展開してきました。

しかし、東日本大震災や福島原発の事故により、子どもたちの外での活動を制限せざるを得ませんでした。あれから4年半が過ぎ、ようやく学校は落ち着きを取り戻してきましたが、里山や森林等の除染は見通しが立たず、校地以外の体験学習の実施は制限されている状況です。

しかし、子どもたちは毎日元気に登校し一生懸命に学習活動を続けています。このような状況の中だからこそ、現状をしっかりと見つめ「未来を切り拓くたくましい子どもたちを育てたい」と考え、これまでの教育活動をESDの視点から見直すとともに、制限された状況のなかでも、日常的に実践できるESDについて追求していきたいと考え、研究を進めています。

1. 白方小のESDの実践

本校ではESDを意識した教育活動を展開するために、ESDカレンダーを作成し、各学年の縦のつながりや各教科・道徳・総合的な学習の時間・特別活動・外国語活動などの横のつながりを意識し、各教育活動を横断的・発展的に取り扱う指導方法を模索中です。その中でも本校の特徴的なものが、ビオトープでの学習です。

トンボ研究家のご指導をいただきながら、子どもたちはビオトープの小川でオニヤンマの産卵から羽化までを自らの目で観察し、感動を味わいます。その感動をもとに、トンボの不思議や特徴、オニヤンマの短い一生、オニヤンマの生活、そしてトンボの歴史へと視野を広げ、ひい



「祖父母参観」での6年生の発表の様子

てはトンボの絶滅の危機にも気づくなど、探究活動が深まって行きます。そして、その原因が私たち人間の生活にあることを知り、自分たちの生活のことだけを考えるのではなく、全ての生き物の共存を願うようになります。子どもたちは、ここ白方の水の流れを守っていくことの大切さを学び、自分たちにできそうなことを考え、学習したことを発信しています。

これらの学習で培われた環境に関する関心は、その後の学習や児童会活動にも広がっています。

2. 白方小のこれからのESD

これまでは「環境の学習」を中心に進めてきましたが、「環境問題」を学習していくと、それだけを追究しても解決できる問題ではなく、「エネルギー」「人権や命」「地球環境」そして「国際(他文化)理解」等まで考えないといけないことに気づかされます。

そんな折、法政大学と毎日新聞社のコンソーシアムに参加させていただくことになりました。法政大学の坂本教授と学生さんの懇切丁寧なご指導により、子どもたちはあっという間にタブレットの操作を身に付け、10月末の「祖父母参観」では、自分たちで作った作品を保護者や地域の皆さんに発表することができました。メディアを活用した新たな学習づくりの可能性が広がりました。

まだまだ未熟な取り組みですが、豊かな自然に恵まれたここ白方の環境を生かし、身近な自然に関わったり、調査したりなどの体験活動を通して、自然環境と人間や社会との関わり・つな

がりに気づき、自分にできること、やるべきことの意識を高め実践できる児童を育てていきた

ネパールとの交流学习を通して～児童が身につけた「4つの力」～

福本 拓人
福島県須賀川市立白方小学校教諭

「伝える相手の気持ちを考えること。」これは、本校6年生児童が、ネパールのチャンディカデビスクールへビデオレターを送るにあたり、最後まで意識し続けてきたことです。

これまで、児童は、4年生でオニヤンマの学習、5年生で岩瀬きゅうりの学習を経験し、物事を多様な観点で見ることができるようになってきていました。そして今年度、本校の「福島ESDコンソーシアム」への参加と6年生の「ネパールとの交流」のお話をいただきました。地域や環境を中心に学習してきたことを発展させ、「異文化理解・国際交流」まで学習活動の幅を広げることができることになったのです。この学習のことを伝えた時、児童は、当初、新しい世界に飛び込む不安と好奇心が入り混じっていたようでした。

ビデオレターの制作に先立ち、児童は法政大学の坂本先生にご指導をいただきながら、iPadで3度の映像作品作りを経験していました。この学習を通して、撮影や編集にも慣れ、スキルが身に付いた児童は、画面の構図を工夫し、動画と写真を上手に組み合わせて使えるようになってきたのです。その児童の飲み込みのよさには、担任の私も驚きました。

しかし、同じ映像作品でも、ビデオレターを作成するとなると簡単ではありませんでした。最も悩んだのは、「何を、どう伝えるか」です。「同じ震災を経験したネパールの子ども達へビデオレターを送って励まそう！」と意気込んでスタートしましたが、白方小の紹介だけでは、「何を伝えたいのか」がよく分かりません。子ども達は悩み、アイディアを出し合いました。

今回の学習を通して、児童には、4つの能力・態度が身に付いたと考えています。

1つ目は「未来を予測して計画を立てる力」

いと思います。



です。どこで、どのような予定で動画を撮影すればよいのかを考え、絵コンテを描く姿が見られました。撮影に優先順位をつけて活動する様子には、私も驚きました。

2つ目は「異文化の理解と尊重」です。11月26日（木）には国際学校建設支援協会の石原ゆり奈さんに来ていただき、ネパールがどのような国なのか教えていただきました。初めは、「ネパールの生活はかわいそう...」と口にしていましたが、話を聞いていくとネパールの人達がとても楽しく生活していることや、子ども達が元気に遊んでいる様子が分かり、自分達と変わらないことを感じ取っていきました。そして「交流してみたい」という気持ちが一気に芽生えてきました。石原さんは、子ども達のネパールに対する意識を「もっとネパールを知りたい」、「ネパールに行ってみたい」へと変えてしまったのです。

3つ目は「他者と協力する態度」です。映像を作成するにあたり、各グループのチームワークが発揮されました。撮影に協力してほしいシーンがある場合には、グループの代表児童がそのことを全員に伝え、自分達でどんどん撮影を進めていく姿はとても立派でした。全員の協力を得て取り組んだ避難訓練や体育館での遊びの撮影は、とてもスムーズにできました。

4つ目は「批判的に考える力」です。「BGMは演奏を録音する？」「このシーン、字幕を付けないと伝わらないかも。」と、児童が進んで話し合い、教え合い、今後どうしたらよいのかを考える姿が見られました。

この学習を通して、児童は、自信を持って自分の考えをどんどん表現することができるようになってきたのが実感できました。また、ネパー

ルの皆さんに伝わるようにと英語を使いましたが、言い方が分からないものについては、担任やALTに進んで聞きに行っていました。「どのようにすれば分かりやすいのか、そのためにはどうしたよいか」を児童が常に考えて制作に取り組む、すばらしい姿が見られました。

このように、子ども達が身に付けた力はたくさんありますが、それはビデオレターの制作を通して「相手の気持ちを考えること」を意識し続けたからこそ、身に付いたものだと思います。このような学習を通じて、グローバルな視点を持ち、将来世界の人々と協力して「持続可能な社会づくり」を担う人材を育成することができるということを強く実感することができました。

いよいよチャンディカデビスクールからの返

ユネスコ・カトマンズ事務所からの
メッセージ
国内プログラム教育担当
タップ・ラジ・パント
(翻訳 坂本旬)

私は皆様がネパールの僻地の学校でプロジェクトを始めることができたことを喜ばしく思います。ビデオで拝見したチャンディカデビ小学校はカトマンズに近い地区にありますが、未だに僻地です。ビデオの中で話している子どもたちはとても不幸な状況にあり、皆様の仕事にとっても大きな意味があります。もう一つのビデオは皆様が日本の学校での実践で作られたものです。このような活動はもっと規模を大きくする必要があります。多くの日本の学校、多くのネパールの学校がこのような活動で結びつく必要があります。これは単にメディアの取り組みを促進するだけではなく、確実に教育の取り組みを促進し、強化するものです。

持続可能な開発目標の第4目標は、すべての人の公正で質の高いインクルーシブな教育に強く焦点を当てており、生涯学習の機会を促進するものです。だからこそ、ネパールはこの第4目標に取り組んでいるのです。もしこのような取り

信を見せていただく日が近づいてきました。そのビデオレターが子ども達の目にどのように映るのかとても楽しみです。きっと、子ども達は自分達とネパールの子供達がつながっているということを実感し、「次」の行動を起こそうとするでしょう。私も、映像制作に携わった人間として、児童と一緒にその感動を味わいたいと思います。

最後に、ネパールのチャンディカデビスクールと交流できたことは、6年生と私を支えてくださった皆様のおかげです。この学習を通して、私自身も国際理解の学習やタブレットを用いた学習をさらに発展させることへの意欲が強くなりました。坂本先生、辻村さん、毎日映画社の皆様、その他いつも周りで支えてくださった皆様方に感謝の気持ちでいっぱいです。



組みが拡大すれば、ネパールは確実にプロジェクトを通して生涯学習環境の促進と支援が実現されるでしょう。これは私にとっても喜ばしいことです。

私たちはこの取り組みをより広い枠組みの中で、つまり教育の可能性と発展、そしてグローバル・シチズンシップ教育の中で考えます。

私たちはより基本的な異文化対話や異文化理解、市民教育、シチズンシップ教育についても考えてきました。ご存知のように、ユネスコはこれまでも部局を超えた仕事をしてきました。例えばICTを活用した教育です。どのようにしてICTを教室で利用して、すでに存在している教育学を強化するのか。私はこのビデオを見て、学校の中に特別なカリキュラムを作れば、すでに学校の中にある教育学を強化し、促進すると思いました。ネパールの学校、日本の学校、そ

それぞれ自分たちの文化を持っています。それぞれの国の子どもたちはお互いの文化を学びあいます。これはとても大切なことです。

私は、皆様がより多くの技術的支援とプロジェ

佐藤彌右衛門さんにお会いして

寺崎里水
法政大学

2015年8月28日、法政大学の笹川先生、ESD-Jの長岡さんとともに、毎日映画社の上遠野さん、益田さん（所属は当時）のご案内で、福島県喜多方市にある大和川酒蔵北方風土館を訪れました。ここは大和川酒造店の古い酒蔵で、今は酒造りに関する資料館として活用されています。訪問の目的は、大和川酒造店の会長である佐藤彌右衛門さんに会い、会津や飯館で始めた自然エネルギー事業についてお話をうかがうことです。佐藤さんは会津電力株式会社の社長であり、飯館電力の副社長でもあります。蔵の1つを改築した涼しい座敷に案内していただき、さっそくお話を聞かせていただきました。

このときは、恥ずかしながら私は事前準備不足のために知識がなく、どういった経緯で会社が設立されたのか、どういう目的があるのかといったことを知らないまま、ただ語られる内容に興奮しながら話を聞いていました。当日とったメモをみると、「喜多方には水も食糧もエネルギーもある」「水・エネルギーなどの地域のものを、国が取り上げて特定の電力会社に与えるとはいかなものか」「地方のほうがエネルギーもったら豊かになる」「地域主権」といったことばが書き連ねてあります。その後、会津電力の第一期事業である雄国太陽光発電所をご案内いただきましたが、そこでも、佐藤さんは「喜多方は独立しようと思ったら独立できる」とおっしゃっていました。

震災以降、「復興」がスローガンとして叫ばれながらも、歴史的に「東京」と「東北」、とりわけ「福島」がどういう関係であったのかが顧みられることはほとんどなかったように思います。福島にとって、「東京」と以前の関係を取り戻すことは望ましい「復興」とはいえない

クト予算を得てネパールで活躍できよう願っています。ユネスコは皆様を支援し、パートナーとなることを歓迎いたします。ありがとうございました。

でしょう。では、果たして「復興」とはどういう状況を指すのかと、具体的な問いとして意識したこともなく、6月に事故後の福島を初めて訪れて以来、なんとなく考えていた私に、佐藤さんの話は突然、問いと答えの1つを明確な私たちで示してくださったのです。

会津電力株式会社は、2011年の東京電力福島第一原子力発電所の事故を契機に、原発に依存しない再生可能エネルギーによる社会づくりをめざして設立された会社です（会津電力株式会社 <http://aipower.co.jp/>）。

その具体的な事業理念や今後の見通しについては、2月20日のシンポジウムで、佐藤さん自ら説明してくださることになっています。私と同じ知的興奮を一人でも多くの人に体験してほしいと思います。

佐藤さんには、ご多忙のなか、お話を聞かせていただくだけでなく、自ら雄国太陽光発電所をご案内いただくなど、大変お世話になりました。どうもありがとうございました。



雄国太陽光発電所の太陽光パネル

平成27年度文部科学省ユネスコ活動補助事業
[グローバル人材の育成に向けたESDの推進事業]
福島ESDコンソーシアム・法政大学キャリアデザイン学部